

令和4年度 学校評価報告書（目標設定・実施結果）

視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月7日実施)	総合評価（3月24日実施）	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	①生徒の知的好奇心を喚起し、思考力・判断力・表現力を高め、希望進路を実現する教育課程編成や組織的な授業研究・実践に取り組む。 ②学校行事や生徒会活動等における生徒の主体的な取組の促進を図る。	①新たな教育課程における科目について、本校のカリキュラム・ポリシーに則り学力向上等について研究するとともに、1人1台PCを生徒が活用できる授業展開の方法について検討する。 ②学校行事を通して、チャレンジ力やコミュニケーション能力を育てる。	①-1 総合的な探究の時間を中核とした授業実践の在り方を研究し、その評価方法について検討する。 ①-2 校内における授業研究において、本校生徒のPC活用能力を向上させることをテーマとし、実践にあたる。 ②学校行事等の運営を通じて生徒の行動力や自主性や主体性を育む。	①-1 総合的な探究の時間を中核とした授業実践の在り方を研究し、その評価方法を作成することができたか。 ①-2 1人1台PCを活用した授業実践を学校全体で75%達成したか。 ②学校行事等で主体的に計画立案や問題解決をする生徒の割合が増加したか。	①-1 新カリキュラムにおける総合的な探究の時間の実践について、学習内容と評価方法について検討することができた。 ①-2 1人1台PCを活用した授業実践を学校全体で75%達成することが出来た。 ②学校行事等で生徒自身による主体的な計画立案や問題解決が図れた。	①-1 総合的な探究の時間を中核とした各教科の授業実践につなげるには至らなかったため、3ヶ年を通じた学習活動をさらに検討する必要がある。 ①-2 授業での活用等に課題が残ったため、組織的な授業改善などを通じて、より効果的な活用を検討する必要がある。 ②学校行事等で生徒の主体性を育て、より一層の自己肯定感の滋養を図る。	①一人一台端末は中学校でも導入され使用状況はおおむね良好であり評価できる。また、高校での使用機会が増えることが望ましい。 一人一台端末の活用上の課題と関連付けて検討するとよい。また、「授業評価」との関連性からも検討することが望ましい。 ②生徒主体に行われる学校行事は、自主性や自己肯定感につながることで重要な行事であり、運営状況は評価できる。	①今年度の入学生より一人一台端末が導入され、多くの授業で活用することができたが、教科や職員間での活用状況に差があるため、授業の中で効果的な活用方法を研究し、職員間での共有を図る。 総合的な探究の時間と各教科との横断的な授業実践においては今後の大きな課題である。 ②感染防止に努めつつコロナ禍で生徒の主体的な学校行事を行うことができ、自己肯定感を高めることができた。	①担当グループが授業における一人一台端末の活用状況を精査し、職員が活用しやすく、生徒の学習効果が高まるように職員研修を実施する。 ②通常通り学校行事が行えるようになった際に、制限を最小限にし、できる限り教職員からの指示を減らし、生徒主体の行事となるようにすることにより、生徒の達成感を醸成することができ、自己肯定感をさらに高められるようにする。
2 (幼児・児童・) 生徒指導・支援	①多様な生徒の個に応じた支援体制の充実を図る。 ②個性を重んじるとともに、他者への共感力と協働的な行動を尊ぶ姿勢を育成する。	①生徒の多様性を尊重するため、支援体制充実のための職員の資質向上を図る。 ②生徒が自己の可能性に挑戦し、他者と協同して体験的・実践的に活動することで共感力の向上を図る。	①SCやSSWを活用し実践的な研修会を開催する。 ②-1 いじめや人権問題などの生徒向け講演会を開催する。 ②-2 上位大会進出を目指すなど各部活動の目標を明確にし、学業との両立を図る。退部率を5%以下にする。	①教員の資質向上が図れたか。 ②-1 生徒の自己理解、他者理解など内面や行動に変化が見られたか。 ②-2 目標達成のための効率的な指導体制が確立できたか。退部率が目標値より減少したか。	①SSWによる教職員全体の実践的な人権研修を行った。SC、SSWとコーディネータによるコア会議を毎学期行った。 ②-1 自己実現に向けて1年生で人権問題などの生徒向け講演会を開催した。 ②-2 関東、全国など上位大会進出し、合理的な練習を考え学業との両立を図った。退部率を各学年5%以下に留めた。	①研修やコア会議の内容を教職員間で共有し、さらなる資質向上を図る。 ②-1 コロナ禍でのコミュニケーション不足からSNSのトラブル等があり、他者理解を育てる指導を充実させる。 ②-2 目標達成のための指導者間の意思統一を図る。退部率を目標値より更に減少させる。	①多様性に関する啓発と理解に努めている。生徒や教員の他者に対する適切な対応は評価できる。 ②部活動の退部については本人の判断であるため、5%という数字にこだわらなくてもよいのではないかと。	①悩みや課題を抱えている生徒についてSCとの面談を積極的に行えるよう計画・実施して生徒への対応を図った。 ②部活動を通して自己実現や共感力を高めチャレンジ力や自己鍛錬力を育成することができた。	①生徒の多様性に配慮し、日頃から職員や生徒が人権意識を高く持ち、他者理解を意識したコミュニケーションを図る。 ②生徒が達成感や充実感を感じ取れるよう、また、顧問が部活動の充実により実績が高められるよう支援を行う。
3 進路指導・支援	・生徒が自らの資質・能力の向上を自覚できる進路指導を実践し、生徒の「挑戦」を支援する。	①総合的な探究の時間を中核として自ら課題を発見し解決する力を育み、社会で求められる自己の役割について認識し、目的意識を持って進路選択ができるように支援する。 ②高い目標を持って生徒が「挑戦」し、希望の進路を実現でき	①SDGsを柱としたキャリア教育プログラムの実践や、進路講演会などの取り組みを通して生徒一人ひとりが主体的に進路選択をできるように支援する。 ②-1 外部機関と連携し、模試の分析会、入試研究会等を行い、生徒の意識付け及び教員間の情	①生徒が主体的に進路選択できるキャリア教育プログラムを各学年で実践できたか。また、適切な時期に進路講演会を実施できているか。 ②-1 模試等の結果の推移を分析し、学力が向上しているか。教員向け分析会、入試研究会にどれだけ参加でき	①SDGsを柱としたキャリア教育プログラムを実践した。進学希望の生徒で進路未定の割合が学年、時期が進むほど減少傾向にある。 ②-1 模試等の分析会を生徒向け、教員向けに実施した。教員向け分析会へのべ78名が参加し、不参加者には記録を共有し情報共有に努めた。またのべ42名の保護者の参加があっ	①新カリキュラムに伴い進路選択の時期が早まることを踏まえて、新1年からのキャリア教育のより一層の充実を検討する。 ②-1 模試等の前後指導の組織的な取り組みを推進する。分析会に参加する保護者を増やし、家庭と連携して進路指導に取り組むことができたよう推進する。 ②-2 各教科と連携	①生徒だけでなく職員にとっても、模擬テスト等の振り返りは重要であり評価できる。 進路講演会は生徒自身が自分の進路について考える一助になっている。 ②引き続き校内進路指導・支援システムの機能充実を目指し、生徒の進路希望達成度を向上させるとともに、自己の未来像に沿った多様な進路希望と多様な進路内容とな	①SDGsを柱としたキャリア教育プログラムの実践により学年が進むにつれて自身の進路を考えることができた。 ②模試の分析会を実施したことにより、生徒の進路実現を支援できた。 生徒が第1希望としている進路への実績を高める。	①進路講演会などの取り組みを通して、生徒一人ひとりが主体的に進路選択をできるように支援する。 ②生徒の進路実現に向けて、模試の分析会から本校の強み弱みを分析し、各教科で対策を検討する。 生徒が望む補習や講習を開催する。

視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月7日実施)	総合評価(3月24日実施)		
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等	
		るよう組織的取組の推進を図る。	報共有に努め、学力向上に向けた組織的に取り組む。 ②-2 大学入学共通テストの平均点を目標指標として掲げる。	たか。国公立、難関私大にどれだけ合格できたか。 ②-2 大学入学共通テストの各科目における得点分析と改善ができたか。	た。 ②-2 大学入学共通テストの各科目における得点分析を行い職員で共有した。	し、模試と大学入学共通テストの関連について分析する。	っているかという視点からも評価を行ってはどうか。			
4	地域等との協働 ・地域に開かれ、地域に貢献する学校づくりを推進する	①コロナ禍における地域貢献の取組みについて検討する。 ②地域へ学校の適切な情報発信を行い、開かれた学校づくりを進める。	①オンラインによる地域交流・協働等をさらに充実させる。 ②地域や他校種、保護者との連携を行い、ホームページを充実させ、積極的な情報発信に努める。学校説明会を通して本校の魅力を発信し、参加者の増加を目指す。	①地域交流・協働にオンラインでの交流等の企画を実践できたか。 ②ホームページや学校説明会を通じて、本校の魅力を十分に発信できたか。	①オンラインによる学校説明会および学校紹介動画を充実させた。また、PTA活動においてもオンラインによる会議の実施に協力し、コロナ禍における活動の幅を広げた。 ②ホームページを閲覧しやすくするとともに、連絡等の速やかな発信を行った。また、学校説明会や見学会等において感染症対策を行い、参加者を増やすことができ、積極的な広報活動につなげた。	①中学生や地域等の要望を踏まえた連携が取れるように工夫する。また、オンラインによる活動の充実をさらに模索していく。 ②より速やかな情報発信を行うため、関係各所等との連携を図る。また説明会等の内容を工夫することにより、本校生徒の様子や学校の雰囲気により伝わるように改善する。	①コロナ禍で今までと異なる方策を行い、学校の広報活動や地域との連携を図ったことは大変評価できる。 今後、正常化に向かう暮らし方の中での地域社会における学校の役割について、主体的な協働の在り方という視点から再構築してはどうか。 ②ホームページは多くの方が閲覧するので、適切に新たな情報を提供出来ていることは評価できる。	①オンラインでの会議等を実施したが、慣れていないこともありスムーズさを欠いた。 ②中学生やその保護者が本校を理解し、関心が高められるような学校説明会を実施できた。 ホームページを閲覧しやすく工夫するとともに、本校の様子を適切に広報できた。	①コロナ禍から通常の生活へ戻った際に、今まで縮小傾向にあった地域との交流や連携事業を積極的に推進する。 ②必要な広報活動については、ホームページの更新を的確に行い、本校の様子を伝達する。	
5	学校管理 学校運営	①信頼される学校づくりを進める。 ②生徒と触れ合う時間を多く作る。	①不祥事防止会議を核として、事故防止の徹底を図る。 ②働き改革を推進し、効率的な業務推進を図る。	①自分のこととして考えることができる事故防止研修を実施する。 ②職員の業務に対する負担感を減少させ、やりがいや達成感が感じられるよう、職員間の協働性の醸成を図る。	①事故不祥事が起こらなかったか。 ②勤務時間管理システムを活用し、月に80時間以上の時間外勤務を行った職員の数。	①事故防止研修を実施し、職員の事故防止意識を高めることができた。その結果として不祥事が起こらなかった。 ②職員への聞き取りによる勤務時間外調査では、80時間を越える職員はいなかった。	①事故につながりかねないような案件があるので、引き続き事故防止研修等を行い、信頼される学校づくりを図る。 ②業務が個に頼ることなく、業務が遂行されるよう、職員間の協働性を図る必要がある。	①不祥事防止会議を活用し、特にわいせつ事案について注意喚起を行うことは重要であり評価できる。 ②ぜひ生徒と教職員が触れ合う時間を増やし、社会で生きる力を育成して欲しい。 職員への丁寧な聴き取りによる課題の掘り起こしや改善解決が図られていることは適切である。 職員間の協働性については、業務の見える化や各業務の負担度などの量的均質化を図ると良い。	①大きな事故不祥事が起こることはなかったが、ヒヤリハットは起きている。 わいせつに係わる内容は個人に起因することが大きいことから、個々がどこまで理解しているか把握が困難である。 ②勤務時間外勤務の時間短縮を図ったが大きな進展は見られなかった。	①ヒヤリハットは一つ間違えると事故につながりかねないので、その内容を精査し不祥事防止会議で検証する。 引き続き不祥事防止研修を実施し、職員間でのコミュニケーションが多く取れるよう、風通しの良い職場の醸成を図る。 ②職員が元気に生徒と触れ合えるよう、業務量の均一化を図る 職員の勤務時間等を働き方改革の主眼に置き、勤務時間外勤務の時間を短縮させる。